

床屋

宮沢賢治

青空文庫

本郷区菊坂町

※

九時過ぎたので、床屋の弟子の微かすかな疲れと睡ねむ気けとがふつと青白く鏡にかゝり、室へやは何だかからんとしてゐる。

「俺おれは小さい時分何でも馬のバリカンで刈られたことがあるな。」
「えゝ、ございませう。あのバリカンは今でも中国の方ではみな使つて居をります。」

「床屋で？」

「さうです。」

「それははじめて聞いたな。」

「大阪でも前は矢張りあれを使ひました。今でも普通のと半々位でせう。」

「さうかな。」

「お郷国くにはどちらで居らっしゃいますか。」

「岩手県だ。」

「はあ、やはり前はあいつを使ひましたんですか。」

「いゝや、床屋ぢや使はなかつたよ。俺は大抵野原で頭を刈つて貰もらつたのだ。」

「はあ、なるほど。あれは原理は普通のと変つて居りませんかね。」

一方の歯しか動かないので。」

「それはさうだらう。両方動いちやだめだ。」

「えゝ、噛かじつちまひます。」

※

鏡の睡気は払はれて青く明るくなり今度は香油の瓶びんがそれを受け取つてぼんやりなつた。

「失礼ですがあなたはどちらにいらつしやいますか。」

「図書館だ。」

「事務員ですか。」

「いゝや、頼まれて調べてあるんだ。」

「朝はお早いでせう。」

「朝は六時半にうちを出るよ。」

「ずるぶんお早いですね。」

「どうせうちに居たっておんなじだ。」

※

ねむけたちま
睡気が忽ち香油の瓶びんを離れて瓦斯ガスの光に溶けて了しまひ室へやが変に底無
しの淵ふちのやうになつた。

「丁度五分かゝりました。あなたの頭を刈り込むのに。」

「早いな。」

「いゝえ。競争の時なら早い人は三分かゝりません。」

「指が痛くなるだらう。そんなにしたら。」

「えゝ、指より手首が苦しくて堪たまらなくなりませす。」

「さうだらう。どうせそんなぢや永くは続かない。」床屋の弟子はバリカンを持ったまゝ手首をぶらぶらふつてゐる。

※

瓦斯の灯ひが急に明るくなつた。

「僕のひげは物になるだらうか。」

「なりますとも。」

「さうかなあ。」

「もう少し濃いといゝひげになるんだがなあ、かう云ふぐあひ工合あひに。剃そらないで置きませうか。」

「いゝや、だめだよ。僕はね、きつと流行はやるやうな新らしい鬚ひげの型を知つてるんだよ。」

「どんなんですか。」

「それはね。実は昔の西域のやり方なんだよ。斯かう云ふ工合あひに途中で円い波を一つうねらしてね、それからはじめを又円くピンとはねさすんだよ。こいつあ流行はやるぜ。」

「今どこで流行はやつてゐますか。」

「アイデア界だ。きつとこつちへもだんだん来るよ。」

「アイデア界。プラトンのアイデア界ですか。いや。アツハツハ。」

「アツハツハ。君。どうせ顔なんか大体でいゝよ。」

※

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十四巻」筑摩書房

1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行

入力：林 幸雄

校正：mayu

2003年1月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

床屋

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>